慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Historical pessimism in the French enlightment, Henry Vyverberg [Havard historical monographs XXXVI.]
Sub Title	
Author	米田, 治(Yoneda, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.109(499)- 118(508)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Historical Pessimism in the French Enlightment

by Henry Vyverberg.

[Havard Historical Monographs XXXVI.] Havard University Press, 1958.

[一]

この書の題名は一見奇異に見えるかもしれぬ。又逆説と思われるかも知れない。それには正當な理由が確かに存する。何故なら十八世紀フランスの啓蒙思想において進歩の觀念が絶頂に達し、それ故、洋々たる希望に充ちた未來が前途に眺望されていたと目されていたからである。それ故ペシミズムではなくオプティミズムが十八世紀フランス啓蒙思想の根柢であらねばならなかった。しかしこの書はペシミズムをフランス啓蒙思想から取出そうとする。そして樂天的な、合理主義的な進歩の觀念を、そしてそれのみをフランス啓蒙思想に觀て來た「從來の見解を再檢討すべき時期がもうとっくに來て居り、遲すぎた感がある」と言う。この言には重要な意味が含まれているように思われる。これを私流に解釋して見るなら、先ず現代が近代とは異った時代であることが問題となろう。近代の根本的定義をなすのに種々の表現が可能であるが、多くの不備をも一応顧慮することなく言うなら、合理主義的な科學的方法を基調とした進歩の觀念に貫かれていた時代とも言い得よう。とするならこれこそフランス啓蒙思想の主要モティーフと從來目されて來たものではなかったか。十八世紀フランス啓蒙思想はある意味において近代思想の核心であった。近代人の眼で—合理主義的な進歩の觀念で—近代の核心的思想を—十八世紀フランス啓蒙思想を—觀る。そこにおいて觀られ構想されるフランス啓蒙時代像には近代人の意識の投影があるに相違ない。しかし現代は近代とは異る眼で觀ることができる、しかもより客觀的に、より公平に。何故なら現代は近代よりも、近代そのものの持っている歪みを知って居り、著者の言によるなら現代は近代の迷いから覺めた時代であるから（P.6）。それ故現代人の眼は近代人の眼の逸していたものを見出すであろう。かくて現代の歴史家がフランス啓蒙思想からオプティミズムよりペシミズムを見出すのも理由のないことではないだろう。もうすでに近代とは異質的な時代である現代に入っているなら、本書の著者が「もうとっくに再檢討の時期が來ている」と言うのも、無理ではあるまい。

以上の如く本書はいろいろな意味において問題のある書である。それ故やや長きに亙るかもしれないが紹介の勞を取りたい。以下順を追ってその内容を示して行こう。

〔二〕

先ず序論においては本書の意圖、適用せられた方法、進歩、ペシミズム等の本書で使用せられた根本概念の定義が示される。先ず著者は決してフランス啓蒙思想における進歩の觀念を否定しない。ただ否定しようとすることは、進歩の觀念がフランス啓蒙思想の唯一無二の焦點であり、論理的完成であったという點である。歴史的ペシミズムも著者によれば啓蒙思想の運動そのものに深く根ざしていたし、啓蒙思想の内部には樂天的合理主義的要素と對抗する、危險極まる潜在力が存していた。

從來の歴史家は進歩の觀念を熱情的に跡づけようとして、當時の進歩の觀念の理論家のデカダンスについての見解を輕視したり、又進歩の思想に無關心もしくは敵對的であった思想家を等閑視し、かような思想家が少しでも注目されたとしても無視してよい反動的な思想家と看做した。しかしより詳細に、より正確に觀察すれば、反動的と目される思想家も多岐に亙って居り、單に反動的として概括することは困難であり、且つ進歩思想の保持者とされる人々の中にも多分に歴史的ペシミズムの存在することが明らかになる。

ここでこの「歴史的ペシミズム」との言葉の意味を明白に規定しておくことが必要となる。著者はこの用語を規定して「現實としての歴史のプロセスをデカダンス、循還、流動の三つの中の一又は二つ、乃至三つ全部であると承認するときに適用される概念」(P.2)であるとなす。それなら循還、流動、デカダンス、更には進歩の概念を明白に定義しなければならない。この四箇の概念はともに運動を表現するが、「流動」の概念は本質的に無意味且つしばしば單なる變化を意味し、「循還」は必然的に計畫、意味、運命—たとえこれらが不可解であるにせよ—を要請する。そしてこの二つの概念に共通なことは絶對的價値なしですましていることである。それ故この二つの概念は相對主義である。しかし進歩、デカダンスの概念はこれと全く異り、歴史のプロセスがある一つの理想又は一連の理想へと近づくと觀る場合、この運動が進歩であり、これらの理想より遠ざかる運動がデカダンスである。以上の如く基本概念は定義される。(P.3)

しかし歴史的ペシミズムを右の如く規定しても思想活動の數多の領域においてそれが見出される故、この面に關しても何らかの限定が必要である。そこで著者は社會的、道德的變化の概念と文學藝術の歴史的運命についての教説に重點をおく。卽ち社會的、倫理的、審美的という人間活動の三つの領域に力點がおかれ、政治經濟の領域は不可欠である限りにおいてのみ叙述される。そしてかような方法で以って、フランス十七世紀、ルイ十四世の時代からフランス革命勃發直前までの歴史的ペシミズムが取扱われる。かく本書の研究の前提を序論にて叙述した

後、本論に入る。

［三］

先ず第一部において啓蒙思想家の先驅者が、十七世紀における歴史的オプティミズムとペシミズムのタイプが取扱われる。最初はデカルトである。彼は進歩の教説を極めて合理主義的な基盤の上において承認したが、經驗主義的要素を持たなかった。それ故科學的知識とその實用面における進歩を、しかも現在より未來への進歩を認めたが、過去より現在への進歩を承認せず、過去と現在との間に斷絶を觀た點にデカルトの重大な限界が存する。

次はパスカルで、彼は青年時代理性と信仰權威の領域を嚴しく二分した。デカルトと異り、彼は實驗觀察を重要視し、これが理性と協力してこの領域における進歩を認めたが、晩年は理性の無力を痛感して、權威、啓示を强調することとなり、結局彼にとって唯一の、眞に意味深い進歩は、彼岸へのキリスト教的準備としての人間のコースとなった。

普遍史論の著者ボスエはキリスト教的攝理觀に基く歴史觀によってオプティミストであり、彼岸の生活に靈的進歩の窮極的實現を觀じている。しかしこれを世俗的進歩と調和させようとし、パスカルの如き二分法を取らない。

それ故彼の哲學は絶望の哲學ではなく力強いキリスト教徒の行動と敢爲と希望の哲學となった。しかし後世への影響はその教説の内容には存せず、むしろ説を立てるにおける毅然たる信念に存した。それ故彼の後繼者には最も激烈なキリスト教の敵對者も數えられる。

以上は十七世紀における哲學、倫理上の問題であったが次に美學上の問題が考察される。

十七世紀の美學理論のドグマであった古典主義をめぐるボアロー(Boileau)とペロー(Perrault)との間に行われ、後に多數の人が參加した有名な新舊論爭(Querelle des anciens et des modernes)が漸次近代派の勝利に傾くことによって、藝術上の進歩とデカダンスの理論が形成されて行く推移が敍述される。そしてこの兩派の論爭に比較的穩健中庸の立場を取ったフェヌロンが——勿論彼は近代派であったが——ギリシヤ古典の精髄を現代に生かそうとした美學上の、嚴格な絶對主義が反って反古典主義への道を開き、相對主義へと傾斜して行く。

この相對主義への傾斜は自由思想家サンテヴルモンにおいてますます強まって行く。彼の「自由思想主義」(Libertinism)は、その懷疑主義から寛容の原理を、その自然主義的風土理論から多樣性と文化的個性の原理をひき出し、その結果としての彼の歴史的相對主義は十八世紀における歴史的ペシミズムの先驅的役割を果している。

更に批評家ベイルはその徹底した現世的態度によって世界を無意味に變化する事件の巨大な集積と觀た。著者はベイルを目して論理的に一貫した態度をとった歴史的相対主義者となしている。

折衷家フオントネルはデカルト的方法を身につけた合理主義者であったが、科学的方法に限界を置いた結果、歴史の領域へ、相対的な領域へも足を踏み入れた。彼は以上のべた十七世紀の思想の折衷的綜合者であった。

これら十七世紀の思想家は大體において單なるオプティミストでもペシミストでもなく、彼らは思想的ロイヤリティを捧ぐべき領域を二分し、その二分した根本前提を統一関係づけようとはなかった故、ある一面において歴史家であり、相対主義者であり、ペシミストであり、他の面においては哲學者であり、古典主義者であり、オプティミストであった—勿論多くは截然と二分できず、相互の混淆し合あているが。—そして十八世紀においても進歩の觀念一色ではなく、ペシミズムとオプティミズムの混在がうけつがれているのである。

[四]

第二部においては十八世紀におけるすぐれた歴史的オプティミズムの代表者が取上げられる。この歴史的オプティミズムの考察は、本書の目的たる歴史的ペシミズムの考察をより明らかに、より本質的なものたらしめる補助的なものと考えられている。

十八世紀における宗教的思想家は大體において反進歩主義であり、反動であったが—この實例がアベ・ル・グロ（Abbé Le Gros）であるが—キリスト教と進歩思想との両立可能性がないわけではなく、この例がアベ・ドゥ・リニャック（Abbé de Lignac）とシャルル・ボネ（Charle Bonnet）であった。世俗哲學の方法を正統派キリスト教の辨證に適用したリニヤックにとって人間理性は信仰と哲示の補足物であった。

理性は神によって與えられ、感覺から獨立して心の中に存在する不可疑の原理であり、それ故ある意味において形而上學は心の Physics であり、自然科學の如く取扱われねばならぬものであった。かくてリニヤックは科學的進歩思想の熱烈なる支持者となり、又彼によれば科學の追求は啓示と至高な創造者を知らんとの意欲をかき立てるものであった。

又一方ボネはカルヴィニズムの影響下に有用性と幸福なる神の攝理の必然性とを結びつけ歴史的オプティミズムを發展させた。

次に進歩の理論が再生の理論（Theory of Regeneration）の形をとった思想家、デシャン（Dom Deschampo）、モレリ（Morelly）、マブリ（Mably）、ルソーが考察される。これらの中、特に重要な人物としてルソーを擧げておこう。特にルソーに關し

ては新しい見解が盛られているから。本書のルソーは從來の浪漫主義者としてのルソーではなく、むしろそのようなルソー像を歪曲、誤解として訂正しようとしている。即ち從來の解釋たる情緒性に對しては理性を、個人主義に對しては普遍的價値を提出し、又彼の有名なテーゼ「自然に歸れ」も、この自然は野蠻狀態ではなく理性と無邪氣な幸福の行われている素朴な社會狀態であり、且つ重要なことであるが、この狀態は歴史的なものではなくして多分に心理的なものであるとされている。文明に對する彼の非難も無條件的な非難ではなく、人間の自由にして自發的な道德的發展を束縛しない限り、文明を、藝術と科學研究の價値を認めるし、人間の善惡の問題では—ルソー自身に多少の混亂はあるが—惡と誤謬は人間の自由と能力の誤用から來るとして、理性の惡に對する統御力を認めている。かように理性、普遍的價値、藝術と科學の發展等についての彼の見解を吟味して行くと、ルソーは原始主義者（primitivist）ではなく人間進歩のチャンピオンとなる。そしてかような進歩思想の最大の代表者がチュルゴーとコンドルセーとであるが、この兩者については周知の通りであるので特にここで述べることをしない。

［五］

第三部と第四部とにおいては、フランス啓蒙思想の歴史的ペシミズムとその歴史的基盤が取扱われ、デカダンスの思想が絶對的價値の合理主義的 schma とは反對の基準を持つものとして考察される。その場合この絶對的價値の合理主義的 schema とはフランス十八世紀の進歩思想が依據した schema であり、理性と自然との兩概念をそれはその基礎において有し、デカダンスの思想はこれらの兩概念とは對立する概念において求められている。

先ず理性であるが、進歩は理性と結びつき、デカダンスは理性の反對概念たる感情・情緒と結びつき、更に觀察・實驗・經驗が結びつく。特に觀察・經驗とデカダンスとの結びつきは、理性と經驗とを同一視した十八世紀思想家の氣づかなかった點であり、從來の研究家の看過した點であり、この點に着目した著者の見解は卓拔である。このつながりについては後述する。次に進歩、デカダンスの概念と自然概念との關係の問題である。進歩が發展する自然の運動でないなら、進歩は偶然的なものとなってしまう故、進歩が自然的（本來的）であるかないかはオプティミズムかペシミズムかを決定する重要な要素なのである。多くの啓蒙思想家は自然の發展的運動と進歩とを結びつけて理解したが、又自然を人間の理性的努力を阻害する力と觀たビュッフォンの如き思想家も存する。この點に關して注意すべきことは當時の進歩の理論家の多くは人間の自然的（本來的）善の見解を取ったが、必ずしも惡の非本來性を決定的に言ったわけではなく、又かく語った人は少いということである。彼らにあっては

人間の善への性向はつねにそれと対抗する惡への性向に脅かされていた。モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ、エルヴェシウス、オルバック、何れもそうであった。少くとも彼らの見解に關して言い得ることは、人間は生れながらにして善惡双方の資質を發展させる能力を有する、卽ちこの双方とも人間にとって本來的であるということである。そして啓蒙思想家の重んじた經驗主義的態度が人間とは善惡の混淆であることを發見せしめたのであった。

次に歴史的ペシミズムの文學的藝術的根柢については、十八世紀にまだまだ根強かった古典主義の側よりデカダンスとして非難された新しい藝術文學の基盤が論ぜられ、その實踐的倫理的傾向、卽ち文學藝術の目的を社會的教化にあるとなす傾向、又讀者層の增大、これらが藝術文學のデカダンスに拍車かけるものとされ、かような新潮流が啓蒙思想の文學、藝術へと流入し、浪漫主義、經驗主義、相對主義へと進んで行く。

世界を歴史的流動として把握する世界觀、これが第四部の問題である。先ずこの世界觀と經驗主義との關係が詳細に取上げられる。經驗主義にもコンディニャック流の感覺論的經驗主義と直接的經驗主義とでも言い得べき經驗主義とがあり、後者は前者の如く演繹、分析、總合という操作が繰返され、貫徹された後はじめて現實との接觸が可能になるのではなく、素朴に、直接に外的經驗のデーターを重んずる經驗主義である。前者からは人間の心の可塑性が精神的成長の基盤であり、精神的道德的完成の保證であるという進歩の思想が描き出されて來る反面、普遍的な環境的決定論への傾向をも内臓している。コンディニャック自身かかる不安な傾向を否定したが、ダランベール、グリム（F. M. Grimm）エルヴェシウスさえも決定論への傾向を時としては示して居り、ラ・メトリー、サドに到っては決定論は中心となっている。

後者の經驗主義は觀察とそれの敍述を重んじ、つねに事實的現實との接觸が維持されている故、歴史的、社會的、心理學的研究と手を結ぶ。世界についてのかかる現實的研究から不可避的結果としてペシミズムが生ずる。抽象的な哲學體系が殆んどつねに樂天的、理想主義的である一方、冷酷な經驗の現實主義はペシミズムとなる多大の可能性があるからである。直接的經驗主義に立脚する歴史、社會、心理の研究は過去より現在における人間の淺薄さ、愚かさ、惡、過失等々の人間のマイナスの面をも暴露する。そしてかかる側面を強調するなら、歴史は人間の眼には陰鬱なパノラマとなってしまう。

以上からも理解されるように經驗主義は二つの形をとって進歩思想の歴史的オプティミズムに挑戰する、そして主觀主義と相對主義へと更に歴史的流動の概念に寄與する。

次に「歴史的流動」という概念と、十八世紀において古典主義と取って代わるべく出現した新しい美學理論との關係につい

ては、矢張りこの新しい美學理論においても歴史的オプティミズムへの挑戰を讀み取り得る、この新しい美學、啓蒙思想において美學には古典主義より浪漫主義への過渡的性格が否定し難い。しかしその場合、プレ・ロマンティシズムとの關係については一概には結論できない困難な問題がまだまだ多く存在する。しかしルソーはもとより、ディドロ、ダランベール、アベ・デュボ(Abbé Dubos)は感情と情熱を、天才の自由なる靈感の飛翔を重んじていることは爭えない。マリヴォー、アベ・プレヴォー等、情緒や感受性の文學上の權利を主張した文學者の輩出はこれを證據立てる。又美的相對主義も十八世紀は保持していた。美學の領域において現われたかかる變化は經驗主義と同じく歴史的流動の概念に寄與している。

歴史的オプティミズムに對する挑戰は既述した如くであるが、かかる挑戰はそれ以外にも觀られる。その一つが一部の啓蒙思想家のとった文化發展における相互保償の理論、(compensatory theory)であり、他は文化の擔い手、文化上の單位の多樣性という考えであった。前者の理論は簡單に言えば文化上の一領域の隆盛は他領域の衰亡を伴うという考えでこれを最も明快に展開したのがダランベールであった。「我々は快適な幻影を失うことなくしては新たな知識は得られない。我々の啓蒙は快樂を犠牲にして始めてやって來る。……この理由で我々より啓蒙されていない諸國民は我々より幸福でないとは言えぬ。」(P・129)。コンディニヤックも同樣の見解に到達し、デカダンスと經濟的繁榮とは相關關係があるとのべている。又文化上の單位の多樣性についての見解は大體二つの要素から生じたと考えられる、卽ち經驗主義的方法による歴史研究とこの時代の未知の大陸への旅行熱、旅行についての記錄の出版である。かかる多樣性の承認は、それが歴史上の時代について考えられるとき時代の多樣性となる。そしてこの多樣性、差違を說明するのに普遍的な環境決定論が採られる。

第四部の「歴史的流動」の章においては既述した如き基盤の上に立つ「歴史的流動」の見解がセナック・ドウ・マイアン(Senac de Meilhen)、ライネル(Raynel)、ダランベール、コンディニヤックにおいて述べられ、グリムを十八世紀の歴史的ペシミズムの最も際立った總括者としてしめくくられている。

[六]

第五部は「人と學說」と題され、補足的なものとして、今までの敍述においてあまり論及がなく、しかも重要である思想家と歴史的ペシミズムとの關係にあてられている。。ここで擧げられている思想家はモンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ、ヴォーヴナルグ、ランゲ(Linguet)、オルバック(Holbach)、ラメトリー、サドの八名であるが、紙數の關係上、この中で最も重要な思想家と思われるヴォルテールのみを取上げたい。

い。

確かに彼は歴史的オプティミズムを抱き、自然法の不變性、人間理性への信仰を有していた。それ故彼は進歩の觀念のチャンピオンであったことは眞實であった。しかしこの進歩をより根本的に彼が考えるようになった時、幾多の疑惑が生れ、彼のオプティミズムは變形されることとなった。特に彼の晩年がそうである。かような變形の最大の要因は「意志の自由」より「意志の束縛」への變化であり、かかる意志の束縛として必然的な、人間を支配する運命を承認する。しかしこの運命と人間理性による世界の形成とは一致するか。彼の答えはその時の氣分と問題とすべき事柄とに應じて、運命をとり又は理性をとる。かような曖昧な態度は他の面にても觀られる。かかる曖昧さにも拘らず、この變化以後においてはペシミズム的傾向が明白に看取される。

それ故彼の合理主義的オプティミズムは素朴なままでは保持され難い。しかし樂天的夢想を抹殺し得ぬ彼は制限された樂天主義を取ることによって樂天主義を保持しようとする。その態度の表現が、彼が遠い未來におけるヨーロッパの没落を信じたにせよ、現在又は近い未來のヨーロッパに對して樂天的態度を取ったことであり、「このよき時代の續く限り、この時代を享樂せしめよ。この地上にとどまらしめよ。しかし一度暴風雨が生じたなら我々の隱れ家に避難せしめよ」(P.128)である。「各自の庭園を耕作せよ」との「カンディード」の結びも又そうである。

本書の著者のヴォルテールについての結論は次の如くである。「歴史的流動、デカダンスを認めた彼の見解が啓蒙思想家にふさわしくないとして無視することは誤りである。彼の思想におけるオプティミズムとペシミズムとの混在の複雜さは、ただ首尾一貫性がヴォルテールにとって美德ではなかったことを承認してのみ理解し得る」と。

[七]

本書に取上げられた思想家は多數に達し、彼らについての著者の個々の解釋を論評することは筆者の能力からも又紙數の範圍からも不可能である。ただ著者が本書において取った方法について若干の感想を述べて終りたい。

現代は近代思想をより公平に觀察できるようになったことは既述した。本書の如き啓蒙思想におけるペシミズムの評價もかかる公平さを示すものと言えよう。それは大いに意義がある。しかし幾多の疑問も存する。著者が啓蒙思想における進歩の觀念を全面的に否定しはしないでただ部分的修正を求めているだけであることは本書の前提であった。しかしこの前提が本書の主張を弱め、取上げられた思想家に對する規定を曖昧ならしめたことは爭えない。何故ならある思想家の一部であって全體で

はなく、相互に矛盾しさえする二つの範疇で以ってその思想家を規定することは可能なのだから。例えばルソーはある箇所において進歩の觀念の保持者と規定され（P.69）、又ある箇所において原始主義者（primitivist）と規定されている（P.79）が如きである。そして本書のかかる曖昧さは著者の歴史觀の根柢から由來している如くに思われる。

「理想をいつくしまなかった思想家は殆んどいなかったと言ってよいし……又彼らは永遠に進歩を希望し且つその爲に働くであろう。……しかしデカダンスは人類史を通じて恒常的潛勢力たり續けるであろう」（P.230～P.231）という狀態が歴史の實相であると著者は看做す。それ故著者によれば歴史の現實に卽して觀る冷酷な經驗的現實主義は、抽象的合理主義的眼―それは楽天的でもあるが―が逸したデカダンスという歴史の實相を觀取する。かかる歴史觀が本書における卓抜な着眼であった經驗主義とペシミズムとの結合を洞察せしめた當のものと言えよう。しかし歴史の實相がデカダンスであり又理想への努力でもあるなら、―そしてそれは著者の見解であるが―歴史に對する經驗主義的アプローチは歴史における人間の理想への努力も觀取しなければならないはずであり、テュルゴーもコンドルセーも人間の歴史のかかる側面を歴史的經驗的に肉づけて歴史敍述をなしたのだった。それ故經驗主義をペシミズムとの結びつきにおいてのみ觀ることは一面的と言えよう。

何れにせよ著者の方法的立場は歴史的經驗主義的方法と言い得よう。經驗的に觀る故、歴史における理想とデカダンス、善と惡、ペシミズムとオプティミズム等々の對立は混在のままにおいて把握され統一へともたらされない。何故ならかかる方法は人間を「人間の本性の合理的見解から結論を下す程首尾一貫してはいない」ものとして觀るからである。ここから取上げられた思想家に對する規定も曖昧なものとならざるを得ない。すでにその方法的前提においてすでに統一的把握を放棄しているのだから。

かような著者の立場よりするペシミズムの重視にはまだまだ問題が存する。例えば一應著者の主張を認めてフランス啓蒙思想におけるペシミズムの存在を承認したにせよ、―このことは是認してよいと思われるが―このペシミズムがその當の時代において如何程の現實的力たり得たかを問題とするなら、著者も認めている如く、それはその時代における行動の原理たり得なかったし現實の力として直接には何の貢献はなかった。そして現實における行動の原理は進歩の原理であった。とすればかかる形でペシミズムを啓蒙思想から取出したとしても從來の見解に對する反論は弱いものとなってしまう。

弱いかもしれないがとにかく反論の第一歩である。この反論の着眼は極めて斬新、卓抜なものであった。それは著者の言う如く示唆に止まったかもしれないが、まだ第一歩であることを

考えるなら示唆に止まったのも當然かもしれぬ。しかしそれは未來への實り多き示唆であり、又極めて現代的意識に支えられていた。それ故この示唆をより統一的、全體的なものたらしめることは肝要のことと言えようし、かかる新しい方向の第一歩として本書は意味深きものであろう。

尚本書の著者 Henry Vyverberg については筆者は詳らかにしないが、Akron University の助教授であり、C. Brinton に呈された本書における献辭よりして Brinton 教授との關係が推察される。

（一九五九、十、七、脱稿）

（米田　治）

彙　報

昭和三十四年度史学科秋季見学旅行記

昭和三十四年秋季の史學科見学旅行は目的地を奈良に選び、十月二十日より數日間をあてた。參加者も多く、行動の便宜の爲、班をわけて見學を行ったので、以下それぞれの分擔執筆にて旅行記を記したい。

天理市に到着して二日目の十月二十日、指導の浅子教授共々

我々二十名は秋晴の下、奈良市内コースを廻る事となり、天理市よりバスで二十分、近鐵奈良驛で下車、まず最初の目的地、興福寺へと向った。

興福寺境内に入り、南圓堂、五重塔を見學した後、この寺の佛像寶物の總決算とも云う可き寶物館へ向い、諸佛像を詳に觀賞した。ついで一行は博物館を見學の後、東大寺を訪れた。

雄大な南大門より境内に入り、まず大佛殿内を人波に押出される様にして一廻りした後戒壇院へ向う。ここまでは人の波も追っては來ず、院内の靜けさの中にも、氣宇の雄大さを感じさせる様な、持國、增長、廣目、多聞の四天王像が立って居た。奈良朝後期の作品である。戒壇院より法華堂へ向う。堂は三月堂ともいい東大寺建造物中、最も古くかつ優れた遺構であり、本堂は天平年間の建立である。堂内には本尊不空羂索觀音像を始め、日光、月光菩薩像等著名な佛像が安置されている、法華堂を最後に東大寺を去り、新薬師寺へ向った。寺は普段と異り佛像の映畫撮影とかで人出が多い。本尊薬師如來像を拜す。十二神將の各像は映畫のライトにその面を照らされ、怒りの形相がさらに一段とすさまじく感じられた。（野口誠）

我々が薬師寺を訪れたのは午前八時を少し廻った頃であったろうか。講堂を拜して奥に進むと、まだやわらかい朝の光が斜から射し込んで、東塔がその影をうっすらと落していた。淡い光の中に浮び上った塔は、さながら一幅の繪であった。遠くフ